

Title	人類學研究 ( 小金井良精著, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	松村, 瞭(Matsumura, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.144(450)- 145(451)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0144">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0144</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

人類學研究 (小金井良精著)  
大岡山書店發行

近年我國においても、漸く人類學的著書の刊行を見るやうになつて來た。この現象は學界のため慶賀すべきことである。最近刊行されたものとしては、小金井老博士の「人類學研究」の如きも、その一つである。こゝに自分が老博士と呼ぶ所以は、齡既に古稀に近づかれてゐるばかりではない。令息良一氏また醫學博士の爲である。

本書は老博士が過去四十年の間に、人類學のために致された業績の内、國語を以て草せられた論文をまとめた、いはゞ論文集である。載する所は、我國の人類學界で、數十年來論争の焦點となつてゐる石器時代人民に關聯する研究を主體とし、之にアイヌやオロツコに關する研究をも併載されたものである。老博士は、世界周知の如く、日本石器時代の人民を以て、アイヌの祖先と見なす、いはゆるアイヌ論の權威であつて、その議論は日本の諸雜誌はもちろんのこと、外國雜誌にも散見する所であるが、若し之を編して一本となされたならば、我々後學の爲に如何に便宜であらうかと、心私かに之が實現を希望して居つたのである。然るに今やその論集を見るに至つたのは實に幸福とする所である。されば

本書には、アイヌ論の基礎をなす石器時代人民骨格の計測もあれば、近年老博士の發見されて、太く學界の注意をひいた石器時代に行はれた齒牙變形の慣習なども、皆包括されてゐる。

一體この種の研究には、材料の精選と、觀察の細密と、記述の忠實とを必要とする。就中、計測上にわたる業績に至つては、綿密な、しかも根氣のよい性質を驅つて現はれ出でた數字を、唯一の便りとする。されば何人にも成就し得る仕事のやうに見えて、却々さう容易く出来るものではない。殊に近年は、骨格の計測あるひは人體の測定には、その結果の處理に高等數學を應用した數理統計學の力をかりる。これは言ふまでもなく、その結果に現はれて來る誤差などを豫測して、これを研究上考慮の内に加へて置かうと言ふ譯である。されば最初計測に際して手落があつたならば、假令結果を數理的に争うて見ても、何等の意義をも生じて來るものではない。それで一見鹿爪らしく表示されてゐる結果でも、一度この數理的検査を試みれば、測定の粗漏も、計算の不確實さも、探知することが出來、従つてその論文に對する價値も信用も自ら定まつて來る。

自分は先年、老博士の大事業であつた「アイヌの體質人類學的研究」に收めてある結果に、検査の意味ではなしに、數理統計學の應用を試みなければならぬ必要に迫られたので、煩多な計算を行ひ、かつ之を圖に表したことがある。その結果、豫て老博士の精緻な性格を知つてゐる自分は、一層綿密なことを感ぜしめられたと同時に、敬服の念を禁じ得なかつたのである。

右は自分の親しく經驗した所で、會々測定と計算の精確を物語

る一證に過ぎないが、數理統計學の泰斗ピアソンの如きも、その業績中に、常に小金井老博士のアイヌ研究を土臺として計出した種々な數理上の價値を使用してゐる。之を見てもその計測の如何に精確なるかを推測される。尙之を證明する事實は他にもある。我が東京帝大の醫學部紀要は寄贈されて、ブリチツシ・ミュージアムの附屬圖書館に全部そろへられてあるが、その内第二卷文は、著るしく手あかに染められてゐるのを見るといふ。この第二卷といふのは、即ち前述したアイヌの研究である。つまりその論文の學界に重きをなしてゐると同時に、その計測の模範的であるを告げるものである。アイヌ研究は公表されてから、既に三十年を経過してゐる。それでも諸學者が貴重な業績として引用參考する。凡そ著述は壽命の永きを貴しとするのである。大部でむづかしいばかりが良いのではない。短篇でも壽命が長く、後世までも重寶がられるものがある。英國においてはワン・ペンニーの書籍に賣れ行きの良い、しかも卓説を載せたものが多いと聞く。今より六十餘年前に出版されたハックスレーの名著「自然における人類の位置」の如きも長篇ではない。しかもその一部は徒弟に試みた通俗講演である。然るに今でも専門家は卓説として引用してゐる。本書も筆細かなるが上に、極めて平易に書かれてゐる。この點において我々後學は大いに學ぶ所がある。

本書に收むる日本石器時代人民に見る齒牙變形の如きも、老博士なればこそ、能く之を發見されたものであると思はせる。石器時代人骨の研究に没頭されてからは、可なり久しい年月がたつてゐる。従つて集められた資料は豊富である。けれどもこの種の研

究は、近年になつて大に注意されて來た結果長足の進歩を遂げた。従つて、老博士の集むる資料に匹敵するもの、あるひは寧ろそれよりもより多數の材料は、諸所に集まつて來た。それでこの發見後之等の材料を點檢すると、それと同じ例は澤山に擧がつて來る。けれども老博士の慧眼は、諸氏に先んじて、この研究のバイオニアたるの名譽を博したのである。この發見の徑路に就ては、別に論文に詳しい記述はない。けれどもどうしてかゝる發見をされるやうになつたか、もちろん眞似の出來ようはずもないが、何だか詳しいその徑路が知りたいやうな氣がする。

附録「島めぐり」は前述したアイヌの研究を大成すべく、明治二十二年の夏、北海道を隈なく旅行された時の紀行で、之を令夫人小金井喜美子女史の流麗微妙な筆にのせて、もらさず餘さず、能く精細を描出したものである。

載する所の四十の論文の何れを通讀しても、上述したやうな細密な、そして忠實な點とがうかがはれる。だからたゞに論說として有益に讀了するばかりでなく、研究の態度を學ぶ點において少からず後學を指導する貴さを有つてゐると思ふ。(松村瞭)

### 朝鮮古美術寫眞集 (田野寫眞館)

日本古代の文化、殊にその美術工藝品を顧みるときは、必然に眼を大陸に向けねばならぬ。その大陸の影響をわが國に及ぼしたものは朝鮮であつた。従つて朝鮮の古美術の研究は、一方大陸の、他方わが國の古美術研究に至大の關係を有し、殊に最近樂浪古墳